

朝夷巡嶋記

第七編

四

春

庫	6	紙本	10
		號番	40
		數冊	

~ 13
3093
34



昭和九年三月末

朝夷巡島記全傳第七編卷之四

東都

松亭金水編輯



續輯第七

以色操英雄

説道清庶民

往昔志賀寺の上人の碩徳悟道の大智識也。年来行ひ澄せし。京極の
消息所と。面祝てより心地惑ひ。多年の勤行一時不虚空。かの玉篋の歌と詠
ふ。色いろの奴やつこと有りたる例よひ。としく人の口碑口碑傳つたふ。況や朝夷の性質性質。疾肝疾肝金腸金腸物
不動不動せむ。義ぎと重おもく。今いまと經へじ。識量識量尤尋常尤尋常を。酒色酒色を以てその心と。轉まじ
か。た漢士漢士をれども。あの年としのまご。二十歳二十歳血氣血氣餘あまり。智慮智慮を再復再復ふ。元来元来聖賢聖賢小
あ。ぎれば。その惑まどひのまご。能あたら。當下當下磐石磐石以熟以熟初初る。ふ。芙蓉芙蓉の脚丹脚丹花花の唇唇。わら
ま。鬢はなの黒くろ髪かみの顔かほへ。在あり。臍へしの月つきふ糸いと柳やなぎの風かぜふ糸いと。ふ。え。あ。れ。る

吉田屋

信濃

艶色えんしきの宵よ不ふ遥とほふつゝりもの。近ちか倍ばいてさるる面影おもかげもち於おかたがくさひの酔よううぐぐく
 痴ちろるが如ごとく。髪かみ芳あや髻むすとあひり。忽たち地ぢ心しんさうり収さめ。人ひと木き石いしふりざれ。吾われとて情なさけの無な
 うんや。然しかまじも不ふ羨せんいせ。と。縁ゆかりて心こころ小こ扣ひひさうや。衆しゆ回わい怨えんさるるも。是これのさ
 諾うけひがう。頼たのむ。往むか往むか往むか。自みづから其その処ところへ曳ひ出だえん。心こころ強つよくも嗜おぼむむむ。髪かみも
 小こ谷やと改あらめて。美う小こ勇ゆうさう。性さがのり。平つね生う小こ不ふ羨せんま。願ねがひも大おほく。可よまぬ
 うん。と。未まぬ前まへう。思おもひ量りやうも。と。れ。と。て。忍しのぶ。不ふ難なんき心こころの駒こまの狂くるふ。隨ま意いて。得う
 ま。未まく。思おもひの。と。け。と。告つぐ。れ。と。猶なほ可よまぬ。奈な何なにも。見みん。強つよて。い。ん。然しかむ。わ。れ。女おんな子ごの
 身みと。て。恥はじ。う。さ。と。張は言げん出だ可よまぬ。と。て。さ。そ。の。伏ふ止とむ。ん。や。悔くみ。ぬ。時ときの。れ。斯ごとく。
 覚さ悟ごも。ふ。け。る。妾めかけが。身みの。久ひさ今いま更さら何なにと。惜あはれ。ま。ん。と。い。ひ。の。探たづね。こ。首くび懷なり。て。把とり。
 抜ひき。も。ん。せ。び。れ。と。吾われ。吐つと。突つん。と。ん。是これ。を。朝あ夷ひに。よ。と。伸の。ま。づ。取とり。腕うでと。
 押おへ。傾かて。顔かほも。ち。祝いわや。悔くみ。ぬ。と。い。ふ。さ。う。と。ま。覚さ悟ご究きゆうめ。其その方かたの。赤あか心こころ

争あう。仇あら。ふ。ま。と。ま。き。や。斯ごとく。う。う。い。不ふ羨せんの。汚け名なと。彼から。と。何なにの。厭いとい。ん。其その方かたが。願ねがひ
 果はき。う。呉くれん。と。听きて。暴あら。う。微わ笑わら唇くちびるも。仇あら。ふ。け。と。身みを。捨すて。必かなず。赤あか心こころと。汲くり
 り。小こ娘むすめ。と。始はめ。の。秋あきさ。引ひく。て。夢ゆめも。と。の。ま。を。め。つ。思おも嫌きらむ。と。も。猶なほ懲おこら。ま。已まが
 勝かち。と。う。ち。つ。け。ふ。言ことの。美うま。き。女おんな子ご。う。み。と。か。あ。ず。編あみ。の。う。る。よ。深ふかき。心こころの。真まあ。く。
 君きみと。思おもふ。の。切せつら。と。憐あはれ。ま。と。い。ん。と。う。ち。覆おひ。袖そでも。南なん奇きの。馥ふく郁よくと。軒のきの。梅うめが。昏く
 春はる風かぜ。小こ園えんの。戸かど漏もて。薰かふ。小こ弁べん一ひと色いろの。朝あ夷ひ。朝あ風かぜ。小こる。び。く。が。如ごとく。須す弥みか。ま。ば。
 朝あ夷ひ。と。う。ち。と。う。ち。伸の。べ。脊せきへ。か。け。て。曳ひ。身みの。般はん若わくも。顔かほも。う。ち。成なる。う。ち。時とき。終しゆうを。
 情なさけ願ねがひの。悔くみ。ぬ。と。張はき。面おもて持もちり。頻あま。り。笑わらて。媚こと。献けんむ。妻あい。時とき。あ。り。て。朝あ夷ひ。を。
 忽たち地ぢ眼まなこと。怒いかり。り。て。汝なんぢ。深ふかく。も。謀まく。と。う。る。色いろと。餌えめ。と。ま。と。と。纏まとり。心こころ乱みだれて
 正ただま。と。せ。び。ま。と。名なと。う。て。罪つみも。不ふ踏ふみえん。その。計けい畧りやく。始はめ。あり。結むすむ。容よう察さつし。れ。と。ま。ら
 ち。の。谷やと。ん。ん。と。思おもひ。怒いかり。心こころと。押おし。沈しづめ。て。マ。ラ。く。も。る。き。操くわ言ごんと。永ながく。以もつ。る。妹あね。腸はらも

沸わかりなり。斯かくるなりとも然さるなり。三寸さんすん不ふ乱らんの舌したとて。陳ちんをばけまと吾の
 聽ききた。いふとのふ世よの譬たと論ろん夢む喰く出しの好すきと。夢むのまがる身みこれ常とこ小こ列れつる
 うのことあて。未こ聞もん不ふ見けんの吾われと汝な今いま宵よ始はめく自みづかららとも今いまとうけて釣つまをふ
 恋こひ慕あこむべき所い謂われう。そのうら汝なが面おもてと観る小媚こびと欲どとことと挑めど。
 心こ中ちゆう小こ殺ころえん縁えん舎しやとて。言こと葉はの端は怒ど氣き彰あつる。あのとのいふ知ちの實じつ情じやうと
 めとう察しう。猶なほともあのも陳ちんぶるや。若か然しからんいふ彼か処こる。疾しやく撮と捧ほうと
 食くりて骨ほねも體たいも微み塵ぢんふるん。宵よ不ふ定さめて侍しやく女にょが。物もの語ごもつつん。聲こゑ力りきの
 不ふど成りすぐやと。白はく眼がんつめる面魂めん勇ゆう士しの相さう貌ぼうとう。小こ羊やうひがくるんえとと。髪かみ
 不ふもうゆる凡ぼん者しやとも星せいと存うとの洞どうとらち返かへんと心こゝろと定めぬいふゆる疑ぎひふ
 罪つみの覺おぼえもあれのと。誓ちかまるふ所情じやうさ。既すで小こ愿ねがひの核かくひの掛かけ替かのま今いまえ
 捨すてんとうる赤あか心こゝろ。眼がん前ぜん小こ滴たつと。駐とどまひふゆるまや。凡ぼんと害心がいじんと抱くの人ひと

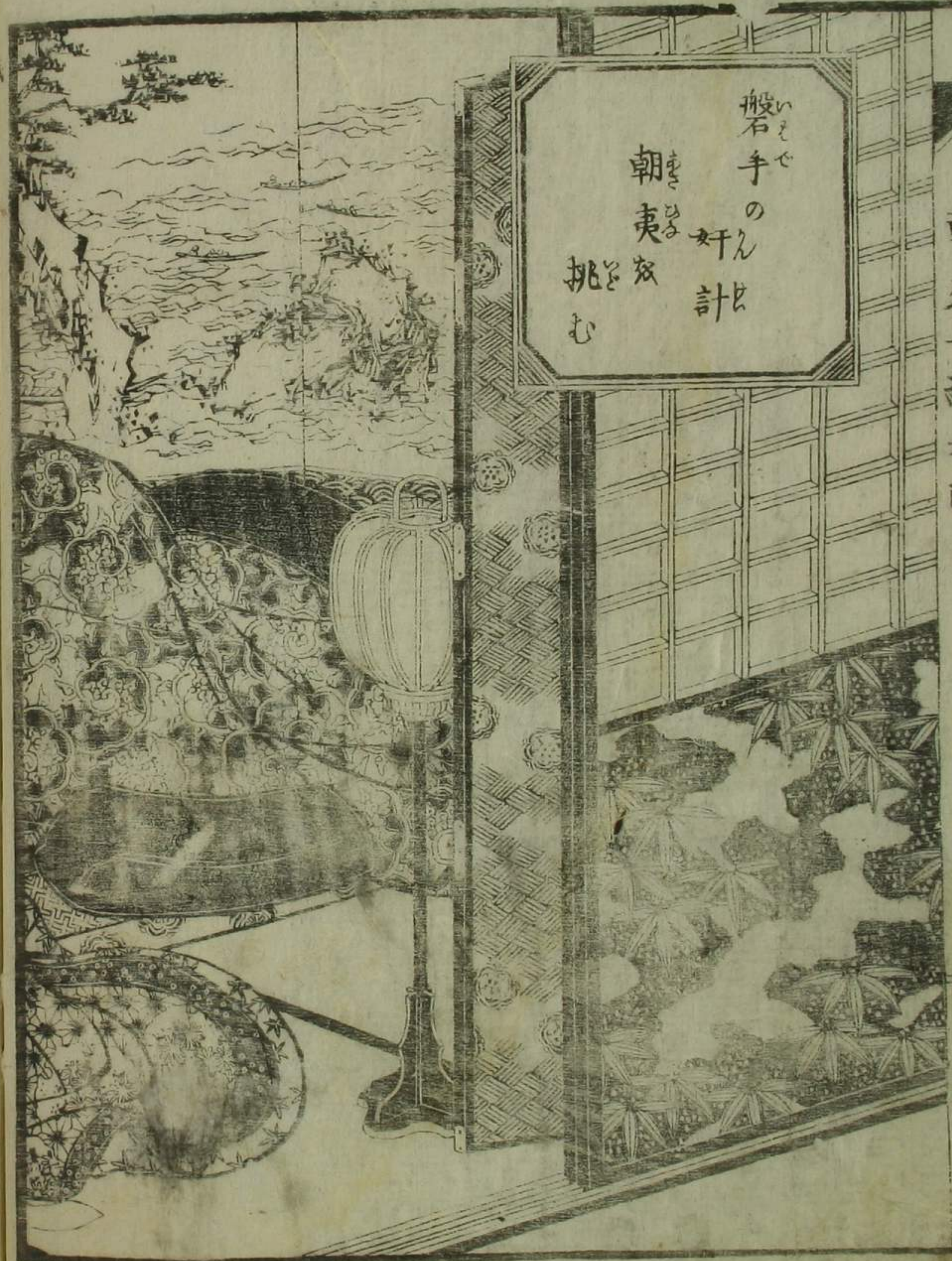
より前まへ不ふその身みと殺ころす。何なんの益えきふらりゆん加旃せん和わ君きんと吾われ侪たいと你らとて
 今日けふ始はめて遭まひふらりるのゆて固かり雙言じやうの恨うらみとありて奈な何なにままとば
 色いろと餅もちと脂のあらうはらふ小陋ろうときのあられいの強あつはら思おもひの命いのちと捨すて
 て慕あこむら。是これと注しゆんうとらま小假かり不ふ色しやくとは回かい答たうとう。今いままま緯いのあらうとい
 あらうとのふ怒いかれと怨うらむと逆さかむらんと。然しかまま不ふ嫌きらひのあらうといふ
 るる因果いんぐわふら。からいて誥ごる身の果たま敢かんまま。勅しやく情じやうの言ことを今となりていはれなれ
 たら一ひととち小こ怨うらむららうと昔のあらうのまらら此こ処こら。千ち回かい百ひやく回かいのまとも和わ君きんう心不ふ確かく心こゝろ
 せびがい死しんととあの念のな今いままま不ふ愛あいずままま友とも放はなすとと朝夷あさひを捕へる
 首くび筆ふでらら如ごとく放えんとすまと更さら不ふ放はなすま嗟あはれつらう毒どく惡あくを鴉の毛色けしきの藤
 へけとと毒どくあらうといふ人ひと愛あいせん。汝な頗なほらら美み貌ぼうあらうと心こゝろ不ふ重ちゆう毒どくと抱くと糖ちやうらり
 も甚し。維いららはらと真言まこととせん今いまひと捨すてる不殺ころままとうと同しあれい今いまと助く

且く此処小窮屈せよとのひも果て在合る紐と掛く傳へあり。諸汝向へん
 まぐ何者も憑きまゝに吾と害えんとするを。実と吐く今助け猶頼抵て
 告ぐとる。此鉄棒と喫いせん。いひる。鉄撮棒と注くと引提て眼
 まる突つひ。まも問と辱り。磐石をこを生懸今。その身の浮沈もらありと
 必およりて溺惑する胸の定め押沈む。滝と散る涙とを人高の玄葉と保
 返し心強しとのへい非道とのも餘ありと頼ふとと忍むの。他の言未
 あるとる。朝夷頭と左右も揮て。そのてらもやとる要る。傍の夕日問とん
 たり疾く実と吐きや。髪は逆立眼と睜と。怒りもまんと威勢も海雄とれ
 心も今いりしと也。朝夷の聰明睿智。その肺肝とん透されていん
 ちとすこと許きまゝに在の隨意とまうと。抑妾の棟梁修羅立郎と二
 の者。殊眉矢藤と妹多。兄が山寨と退くは妾とる阿武隈大夫と頼らとてり

一。其後般石城の石称小思と端も側室とる。栄曜小月日と送らう。幽
 うふまけの兄矢藤と和君がふ討と。隠ともあはぬ此処の風。悪人合ると
 兄の兄いと敵と討てんと。ふあめらう便とゆも然る小這回陸のへ和君が下まらう。
 望ていよくよ便便宜とゆる心地いなる。甲斐多き女子のふく小及ぬと身と願
 る。心小款きく在ける。主する四郎時直め。いりる青赴う具ふあねと和君と根
 むらう。あまの。苗様小賺も油断と計も。一突小刺殺せよとれ。兄への孝も
 主君への忠も即ち漢士小勝する勲功ゆて。その後りく寵愛厚く。歡樂栄曜小
 侍とる。よ仕課せよと阿武隈が諭多て頼てと首と入。通與ふらまはとこれ
 天と心と憐とて。兄の敵と討まらるん。豫てやう朝夷うらむを双の勇士なりと
 いへ。酒と勧め心と乱し。色の買の計うん少い。千小も仕損ず。このあじと
 小も。ひらく。筒の。心ふも。死虚言ゆて。釣んとすこと。石うらも。はきか



〇五



般石^{いそで}の手^のの^{けん}奸^{けん}計^{けん}
 朝夷^{あさひら}の^{けん}奸^{けん}計^{けん}
 挑む^{けん}

呆も果て髪もふろく心けり。渠も恨と報ゆんと念疑す。いふれば仕損する
 とあつてうきふ然りと女子の甲斐なき彼と利ど毛も。利しうらう然も多
 へその透なぐて黙止せし。あの二の外の外あし。今も女時あて侍女と彼処へ遣て
 動静と知らせん然るうくと意頭あて候て半時斗ふし夜を全く明けと
 侍女婢女とひ起し奥院の賓客が目ざんぬ。嗽の水望。りく湯もまわら
 せ。傾性おやと抹惚する婢女ともと急ままら。いざとて迷の回廊足音する、
 駈ぬれて裡の中と候がふらや朝夷も床のうふ起率りある景勢かると障
 子と聞き其処へ入る。賓客目見のひら。嗽の水と進らせんと。朝夷点次て
 傾て持て来るといふ婢女どもいまも近戻。如此といへ時直が他ふ汝も怪しと
 必ふといふなきやと問うけ。定ふ心着侍らねど怪しと思ふといふ朝夷大
 人いざ一個蒲團の上お坐しひぬとて心中訝うく思ふ般をひ朝夷の其

怪力の物語ふ忍とと做して彼処へ往き子舎お潜を居る。嗟り甲斐入る
 ところと吐きまぐら髪も子舎と取きてつととと脱もる。脱あはる衣どもの
 その俣あまは往する。疑ひあは然いあ。彼処お居らぬを訝しきと三念あぐ
 考へても必ひあまるとさへ。兎角するらふを朝餉の出未うらうの程お
 然いして四郎時直の衣服と改め朝夷と舎せり方へ到る。挨拶して右袂
 尤ねとど。いふも怪しとありあ。爰お於ていり益不審なれ何とら
 護身影も思ひつ。夫が安否と兎やあ。角やあんと案トて。更ふ心も落
 着と折る朝餉の膳持出。朝夷始り居る。形のゆくふ今秋して早ふ
 食仕する。その時お阿武隈太夫の敷居の傍おま。つきて。昨日觸と出される甲乙
 都て十人斗で。名も傳と捧てま。彼処お控へ居る。如何ふ計らひやんと
 いへ朝夷點頭て今より直お彼場所へ到りてひとまづ検断ま。供の

準備とすべし。僕等不傳えりしれといひ捨て置けり。去未解城氏より
 足下も俱来ぬと。いつ時直前ふま。頼て玄関へも出さる下あふ
 集令一人等。まゝ一般小礼と做せ。朝夷逸々令釈す。さて夫の訴状を
 懐ふして立出るか。てまづ解城の郡夷志見角谷の二郷の人民且その莊の
 地頭なる誉田池月などの徒と悉く召集令て訴状の趣きとめて。その旨
 趣と尋ね。小筒小賊首修羅五郎。経任がたぬ小掠らして。所持の本意を
 けざりし。処嫌倉より村を下り。竟小賊多し。誅伏して國中。公事小飯一
 元。元の如く小領さんと。隣郷あり。牒ト合せ。且守護する。解城どのへ
 そのうと訟へて。互小傍示の杭とて。後葉の徴小るるとする時。隣郷の
 のその界の乱と。とて僥倖小土地と掠め奪りんと。是れ小うく斯のどき。淨
 論あり及び。原る。理非明白。小先規の如く。所務さる。守す。くはありと

何とも同し。訴状状を。そのいふ所も。弁一けし。朝夷篤と聽定め。汝達がいふ
 所甚以て。纏まら。そのく右幕下の。時小四海の擾乱と。鎮ゆる。小万民賜と
 稟て。太平小飯。鼓腹して。楽いと。と。後果して。私欲の。小茶。まんと。と。奏
 する。ひ。總追補使の職と。請て。一。国小守護と。せ。ま。二。郡小地頭と。置て。その掠
 奪と。誠め。然る。小當。は。境あり。且。廣大。なる。ふ。より。性古。も。既。小國府の外。小
 鎮守府と。置。ま。り。則。其。例。小。做。ひ。て。五。郡。あり。て。一。人の。守護。あり。と。れ。を。已。が。い。ふ。ま。を
 由。り。汝。達。の。如。く。訴。さ。る。ん。然。る。小。且。修。羅。五。郎。が。暴。悪。小。う。り。て。侵。さ。る。と。も。賊。誅
 伐。小。あ。ら。ぶ。の。後。は。猶。先。規。小。順。ひ。て。是。と。領。さん。小。誰。り。ま。す。と。掠。ん。奪。ふ。の。事。あ。ん。
 ち。う。と。緯。の。紛。と。小。案。ず。他。と。掠。め。て。已。と。倍。の。賊。より。も。甚。し。畢竟。と。ま。る。の。乱
 雜。と。糾。さん。為。の。守。護。地。頭。と。の。職。小。あり。ま。す。治。め。さ。る。推。て。お。つ。菴。草。あ。ん。の
 故。る。べ。し。さ。り。ま。ら。ず。是。れ。その。献。さ。る。の。不。良。あり。て。受。る。者。も。不。良。な。れ。俱。小。論

なる所あり。汝達も人倫の大道と悦ばせん。その大道といふは道徳の道徳を所信仁
 義禮智信なり。仁と恵と憐れむといふ。凡そ上在りの耕をばて食ひ織を
 して着る。他人の辛苦を食ふ。衣食するも不仁不似。民の爲る害を除
 き。不良を禁。善を導き。老を養ひ孤獨を恤。凶歳飢饉ゆるとも。飢渴
 の難と免。其を免。その産業を優ふ。且下この情と察して。嫌ふことなき
 め。その程。不樂をせ。世を送る。汝做さむ。その苦辛且く。休むことなき。功
 あり。人々を敬ひ。衣食を献。勞易。然るも時上在りの。莫
 大なる俸禄。その才の榮耀の料。思ひ權威。不任く。民を虐げ。珍膳不飽。綾
 錦。才小纏へ。も足らりとせん。頗る貪る。のろふ。民を。是も貪らむ。と。
 偽と構え巧を競ひて。利と射と。言と。愛ふ。於て上下和せ。互ふ。その
 虚と候ふ。敵も不在。と。良も。仁恵と。去て。上より下と。街ふ。似

とう。其義の則権あり。法あり。故に罪人と刑罰するも。汝と存す。て。不仁といふ。
 あべての人の上おむ。道小遺。そのもの。汝非。是と取。人小東西と。其え
 物と受。も。汝小。是と做。既。這回。論の。先規。あり。各の。あり。
 小。知。ぎ。と。私欲と。逞。あり。人。と。掠。めて。吾利。せん。す。是
 不。汝の。才。一。心。て。心。小。問。は。い。小。恥。か。ぎ。ん。その。汝。小。あり。や。不。や。と。知
 る。是。則。智。とい。あり。元。末。鄉。黨。隣。里。の。交。り。互。小。志。と。厚。り。て。人。小。讓。と。れ
 と。の。小。ま。その。心。小。真。あり。て。偽。を。め。と。信。とい。小。の。五。と。守。と。誠。の。人。と
 の。小。ま。き。り。然。と。汝。達。と。も。の。界。小。あ。る。と。已。と。富。さん。と。計。り。か。
 淨。論。小。及。ず。不。至。と。考。は。五。常。と。失。る。り。吾。若。年。の。才。と。以。て。聖。と。ま。く。五。常
 と。況。の。汝。達。心。小。烏。澗。と。か。め。ん。然。れ。ど。も。今。の。所。に。全。く。已。が。言。語。小。あ。る。古
 への。賢。き。人。が。教。へ。か。う。と。の。迹。あり。吾。若。輩。と。努。悔。ら。ん。情。と。默。識。る。さ。ば。

勞せむしてその非を知ん。その非を知り先規とて。田と領ち界と正と少し
 も難きことあり。よくやうと喻さして其処する甲乙口と嚙と。芝居なりしう。登田
 池月とも進之と言ひ申す。いうふも大人が宜ふ所。人道の大本。わんは不起と
 とあり。今その理解とす。及びて心中勿心地。氷解せり。つまじく職在るが
 下民と喻との智量たり。却て大人が言語とて。始めて。覺るゆい。残るも
 と頭と搔後方。村長等とて。招き。汝達も檢断使。朝夷大人が
 諭言と逐一小言つらん。言でものとな。守護目代。どの人のうら。筋ふ
 斤員。負て。こま。減。彼と増。理と曲。うら。うら。猶下の禱ひの。目
 小募。了く止時。果。鬪諍の。前とも。あんとせ。と吾。押し。檢断使と
 ま。請ふ。他の。ゆ。と強。願ひ。規模の。今。彰。とて。大人。どき。理。非。明白の
 檢断使と下され。い。ま。汝。達。が。幸。ひ。ふ。と。吾。も。猶。慶。ば。い。つ。ふ。汝。達。と

覺。て。その。以。詞。小。從。が。名。但。し。他。小。所。存。あり。や。隱。ま。ん。預。言。と。い。う。小
 奈。何。と。問。か。さ。ば。村。長。共。の。踊。り。出。さ。し。く。田。夫。野。人。も。少。し。の。義。理。も
 辨。へ。り。ぬ。あ。る。近。年。住。ぎ。土。地。と。賊。小。押。領。せ。し。ま。て。り。一。日。も。安。堵。の。あ。ひ。あ。ず。
 ち。の。賊。既。小。滅。び。て。の。数。代。傳。り。居。屋。敷。田。島。元。の。如。く。小。あ。ん。と。思。ひ。の。外。の。所
 下。知。り。て。或。ひ。減。し。或。ひ。ま。良。田。と。上。り。と。その。代。小。年。と。水。と。早。と。小。登。少。う。死
 瘠。地。と。死。ら。う。あ。お。於。て。戸。毎。の。り。の。か。て。衣。食。の。料。小。足。ら。を。先。規。の。と。く。を。れ
 そ。ま。小。割。附。の。り。莫。大。の。小。慈。悲。あり。と。一。同。小。守。護。の。小。館。へ。歎。き。て。の。ち。の
 願。ひ。と。聽。入。る。刺。さ。上。と。蔑。如。し。烏。詩。の。り。の。と。て。咎。め。る。甚。あ。き。を。卒
 舎。ふ。ち。う。ぶ。さ。ま。甲。斐。の。農。夫。あり。と。も。よ。と。東。ね。く。自。滅。と。俟。ん。や。同。今。と
 捨。ら。う。守。護。の。小。館。へ。押。よ。せ。て。生。死。と。定。め。ん。と。い。ふ。理。あり。ぬ。が。斯。て。い。う
 吾。が。越。度。と。う。んと。惶。と。今。日。ま。で。駐。め。ち。き。ん。然。る。小。檢。断。使。の。小。下。向。在

斯の如く宜ふ天より佐けりふりのり。争う違背まうすま。嗟嬉一は
 有り。年老る兩親及び妻や子供と安らうふ養ふことの有難。實小産土
 神あて在まをそ。伏拜むりのえ多。朝夷その容を視て守護目代を
 私うと。象するのう。色小も生ま。不肖多。一言と。忽地諾い無異小復
 する。吾小於ても飲び思ふといひつ。後方と視る。磐城阿武隈のうち
 對ひ。如く在下。諭あ依て渠多。服し。渠多。所持の良
 田と奪ひて水早の憂へある田とそ。小換ら。元来不良の族小あること。守
 護目代。足下。指揮小因て所勢。さう。い。や。已。東西と思ふ。然
 うと。今。改め易て。や。先規小復する。も。奪。如思ふ。い。て
 下愚の常情。或ひ。已。非と顧む。遺恨と合む。族も。は。ま。后來の
 争ひ。う。喻。て。盗人ありて。他の東西と把獲るとき。い。や。已。東西

と思へ。本人。と取戻。怒。恨。を仇。とす。と。の。理。存。一。の。な。れ。が。
 丈夫の族小物と把り。く。ま。其心と宥む。元来非道多。の。と。宥む。法。
 あ。ね。と。も。理。曲。て。事。と。計。も。時。小。取。て。の。便。術。多。く。ま。て。の。族。小。共。小。
 べ。米。錢。足。下。多。が。積。蓄。つ。る。所。と。り。節。小。領。ち。供。え。ら。ま。上。あ。る。時。足。下。
 等。が。惠。小。懐。き。て。の。末。も。永。く。泰。平。と。致。ま。下。凡。そ。二。国。と。治。り。の。い。一。の。の。
 民。富。と。り。て。已。が。身。の。富。と。り。一。郡。一。郷。と。治。り。の。の。も。その。理。小。於。て。多。く。人。
 いう。小。その。意。と。は。ら。ま。う。と。必。ひ。も。う。ぬ。美。秀。が。勘。ま。高。小。守。護。目。代。を。小。包。
 直。と。受。て。私。を。る。その。金。錢。と。再。本。人。へ。返。さ。ま。あ。ん。ま。る。小。あり。阿。武。隈。が。こ。こ。ら。の。
 つ。る。物。と。い。え。ん。と。あ。り。し。と。磐。城。の。怜。惻。漢。士。あ。て。名。朝。夷。が。心。中。と。粗。暴。す。る。と。怒。
 小。拒。ま。は。は。り。賄。賂。の。筋。見。し。て。後。雅。の。志。と。あ。り。と。思。ふ。あ。も。急。小。阿。武。隈。が。
 袖。ひ。き。止。め。その。身。急。地。進。出。て。仰。す。處。逆。一。小。美。足。と。回。答。け。り。ら。小。於。て。朝。夷。に。



月長七編巻目

〇十二



朝夷七編巻四

村長とて其所の市園帳と出さる。さて下司と呼集令てその由と示し。形かたちの如くごとくふそましくへ割渡わりわたさる。と令しめ下。聚城三十六郷あつりやうの諍論一時小果しやうろん。一ふ朝夷心中不欽あさひなびつ。かの時直等と先まふえ。旅館りやうかんと存ぞて帰かへりける。

再揮倭者拙謀 且勝奸智舌頭

于茲湯島泮太郎あふの時直等と商議しやうぎして。磐いわゆると假かりて秀秀と刺さん。この輒さかしと必かならし居ゐる。不計ふけいらんや。その翌あつの朝あさふ至いたり。朝夷あさひなの恙やまる。却かへて磐いわゆる何地なんぢ往ゆけん家の内うちふあ。どこの心易こころやすく。ま右みぎま左ひだりを思おもひ。苦くせども。其処そこへ見みつと出でさる。身みる。潜ひそて物ものと思おもひける。朝夷あさひな始はじめ時直ときちか阿あ武隈ぶくまの餘あまの人ひとと出でさる。館たてのちも寂さびや。ある。あぞ密ひそふ其処そこと。ち出いで。かの朝夷あさひなと宿やどある。突つ舎しやのちへ到いたり。裡うちのちと候うらがふ。僕わがと必かならし一ひと面おもて個ご。

うち成なりて居ゐる。動靜どうじやう不序ふじゆ悪わるし。と立戻たちかへり。然しかる。よても磐いわゆる在所しよ彼処かこ。あ。そま。こ他たへ往ゆき。あ。ぬ。苦くら。い。う。ふ。も。あ。探たづね見みんと。あ。と。僕わが等ら。在あり。と。い。い。と。都合つごふあ。ら。う。ら。ふ。磐城いんぎの庖厨くわうの。と。賄まわる。男おとこの。貸助かすける。日ひ未なり。と。心利こころきう。ま。う。渠みちふ。心こころゆ。う。と。倅せと。固かたら。い。と。安やすし。腹はら裡うちふ。計けい技ぎて。預あづかり。助すけと。密ひそに。招まねき。耳みみふ。口くち傍はたせ。如ごとく。計けいら。ふ。い。ひ。ま。い。ひ。貸助かすけ忽たち地ぢ送しやうひて。倅せひ。昨夜さよふの。残のこの。殺ころさ。その。ま。あ。て。種くさねあり。在あり。下したに。計けいら。ひ。て。と。ま。う。暴あや下男したおとこの。甲かぶ乙おつと。促うながし。え。美珍みちん珍膳ちんぜんも。大おほか。ふ。整ととのひ。ま。い。ひ。の。種くさねと。う。齋いひと。彼方かたへ。朝夷あさひなが。か。ゆ。う。迹あとと。成なる。僕わがも。あ。う。ち。對むかひ。て。莞尔わんじや。う。ふ。か。く。明あ陰かげの。畱守りゆうしゆ居ゐる。と。退屈たいくつふ。在あり。ま。ゆ。り。な。や。日中ひちゆうふ。も。程ほどち。う。け。ま。聊いさ般ぱんと。調てうら。う。ふ。一ひと盞さんと。傾かたけ。う。僕わが平生へいぜいの。庖厨くわうの。と。の。厨くわう。と。ま。い。ふ。甘あまん。然しかる。ふ。今日けふの。刀やいば称なづめ。出いで。暮くれる。と。い。帰かへり。も。あ。じ。ま。う。ま。ま。と。い。邂逅かいごの。非番ひばん也。

何れと彼人の慮ひの外なる。聰明ありて忽地ふ腹の裡とん透され聞ひ知
 失し。胸ふあうてあうへ陳すとも許され。思ふふより在の次第逸
 明と地ふ言あう。何等の故とも分がけし。後の穿談の種を縛
 揚て彼処へ入と。微漣と懸らまこれ。物のいともすす。名預死ねと
 思ふても。夫と已がまう。志強面令存生。悔しきの今かり。刀称
 ちの計救え。明せてのいと悔あ。只愿わう。今あう。妾と殺し。測川
 然るう。人あう。體と埋。その陰と隠う。今あう。妾と殺し。測川
 刀称。害心あり。いふとも。然るとも。頼抵。の証。扱とさる。絶て
 るけま。朝夷も術。うう。ん。さう。身あり。て。勅。心。道。の。い。り。去。来。と
 殺。あ。う。と。身。と。扱。伏。て。う。ち。款。く。湯。島。信。と。終。る。忽。地。ふ。掌。と。拍。て。う
 湯。ハ。矢。藤。五。妹。と。雄。と。あ。ま。き。奉。動。感。心。せ。り。思。ふ。と。も。是。れ。さ。の。証。と

消さのともめて。益とさる所。う。ま。こ。ん。身。の。兄。の。敵。眼。前。ふ。あ。る。と。見。捨。て
 死ぬ。と。り。て。本。意。と。す。あ。や。勿。論。朝。夷。の。惶。し。ふ。心。あ。る。刀。称。の。密。事。と。え
 明。せ。て。い。女。あ。う。も。比。怯。る。奉。動。さ。り。き。然。し。と。も。洩。せ。う。六。駟。も。言。ふ。及
 ち。後。と。い。ん。今。さ。う。何。と。う。せん。され。ば。此。処。あ。て。死。さん。と。思。ふ。今。と。存。生。と。い。ふ。身。あ。る
 大。望。も。果。し。と。あ。う。ふ。城。の。刀。称。も。難。あ。る。全。き。計。策。と。さ。ん。と。す。る
 心。の。ま。ま。い。と。死。し。と。す。て。髪。の。湯。島。の。顔。う。ち。成。す。と。夫。不。ど。の。計。の。い。あ。ぶ
 可。惜。き。今。と。い。う。捨。ん。と。ま。き。開。い。ま。い。う。る。便。術。も。妾。の。身。あ。て。成。へ。る。教
 へ。ら。し。し。領。計。ら。ん。と。膝。さ。り。よ。す。れ。ば。津。太。郎。の。故。意。と。呵。と。う。ち。笑。ひ。の。便
 術。種。と。あり。然。る。も。う。う。ん。身。が。如。く。心。弱。く。何。と。う。為。さん。是。の。苦。肉。の。謀。計
 と。て。輒。く。行。ふ。き。あ。あ。ま。教。へ。う。も。詮。さ。き。て。あり。死。ま。い。死。ね。今。惜。く。存
 生。て。証。さ。ら。自。ら。災。ひ。と。招。き。う。と。暗。ふ。扇。ま。と。言。さ。よ。と。す。て。髪。の。涙。と。流

あつ。妾筒ふの甲斐多し。大事と洩せし科あまは。まこと如此とこと必とされ。今ハ弥覚悟と究めて。身ハ亡めぬ心ハ決しぬ願ふる為様と示しぬ人。切不請。その面魂女子も思ひ詰る景勢され。湯島の魚頭ていよく心の決しぬ。教あるふと難うき。昨夜の色めと誘ひこれ。渠も多し。そのまを食む。這回ハと表裡しく。筒様と計る。考下必ら頼抵て。昨夜のこと言暴る。偽なりと言消きて。おん身がのたきこと。のこ。立る。渠怒りて。まきくおん身と誓ふ時。時直阿武隈も如此と。渠。威勢勿心地。推ける。然もな。我を張て狂ふる。若狂ハ。その坐と去らせん。研て兩段と。渠何なるの術ありとも。既此方ハ多勢あり。殊少の酒と強飲して。計らば何を仕損ふ。心はゆるや。おん。よく魂と居る。おん。克る。と。示せ。秘を具。不。畢。丈夫。の。易。

り。刀称ふる。その。差の。や。おん。語。不。開。此方。泥濘。定。心。謀。と。密談時。移。秋。日。陰。の。頃。時。彼。朝夷。番守。下。奴。此。頂。不。や。醉。醒。て。起。あ。る。そ。も。官。助。が。馳。走。て。おん。外。太。醉。う。息。と。え。ま。が。申。刻。過。ぬ。刀。称。も。程。多。飯。も。おん。杯。盤。と。り。収。め。と。立。の。ま。こと。ま。が。醉。の。篤。と。醒。わ。が。浪。と。院。の。ち。おん。散。し。る。東。西。と。片。倚。ま。と。ま。る。ふ。外。の。方。暴。不。噪。が。あ。る。飯。ア。と。い。おん。其。処。へ。馳。け。おん。先。不。立。て。と。ま。おん。副。ふ。城。四。郎。阿。武。隈。太。夫。も。後。方。不。在。を。折。う。ら。ま。る。玄。関。へ。馳。か。る。輩。の。當。所。の。知。縣。岩。淵。作。理。芋。瀬。華。六。多。と。始。め。ら。う。這。回。の。條。不。加。ま。合。さ。る。上。下。の。官。吏。七。八。人。も。二。谷。不。並。居。つ。その。旁。と。謝。し。且。今。日。朝。夷。大。人。の。教。諭。おん。て。う。の。淨。倫。一。時。不。決。し。庶。民。安。堵。の。思。と。ま。と。て。吾。等。不。於。也。

この上なき慶びゆくは、高き此館小待受し、心半の東西と捧て大
 人愈心と謝せん為り。去来と此方へ来り、先小立、磐城館のいと廣
 らうる書院へ誘ひ、まづ上坐へ、去来と居て尊敬、その容さ、小他言を
 いらゆるゆゑ、この頃の人、心あ、油断さ、と朝夷、まき程、今、秋、と做て
 今日、終日、勞ま、る、小彼、処へ、往て、休息、さ、んと、才と、側つ、と、作理、莖、六、五
 より、ま、づ、つ、雲、時と、推、駐、も、果、敢、け、ま、ご、も、捧、物、と、今、奉、る、所、あり、這、在
 下、等、が、す、志、ま、ると、往、め、ら、ま、て、強、固、く、辞、す、も、斥、部、の、人、め、ま、て、善、も、何、と
 ぞ、と思、ひ、て、本、坐、小、復、と、弁、小、性、童、と、始、め、り、阿、武、隈、る、ご、も、奔、走、し、て、
 持、出、る、珍、膳、美、味、所、せ、ま、ま、並、べ、り、朝、夷、い、こ、ま、と、り、て、這、い、殊、と、し、き、馳、走、ま、
 在下、酒、の、嗜、め、り、酒、菜、の、常、小、三、種、の、東、西、と、り、足、り、と、ん、海、濱、も、程、近、く、
 め、小、か、く、鮮、け、き、魚、と、も、需、め、り、と、人、力、と、下、小、費、を、所、在、る、べ、り、却、て、心、小

快、く、と、苦、笑、大、ひ、ま、る、當、下、小、四、郎、時、直、の、衣、服、と、着、更、て、あ、く、出、来、り、
 大人、と、然、の、こ、ま、言、の、ひ、と、這、い、知、縣、等、が、志、と、表、を、ま、ま、と、い、る、辞、と、ら、小、本、意
 る、ら、ん、去、来、と、献、酌、の、人、と、已、ま、づ、酒、杯、と、把、あ、げ、て、朝、夷、が、前、小、居、り、勧、め、り、
 何、と、小、義、水、乃、ま、の、小、固、辞、を、て、杯、と、り、け、ま、づ、係、で、儲、の、侍、女、等、粧、ひ、装
 り、て、前、後、小、ま、酒、菜、と、扱、ち、折、敷、小、ま、ま、て、一、個、の、前、小、か、く、小、於、て
 かの、作、理、莖、六、の、前、小、進、め、り、自、り、酌、と、と、り、朝、夷、か、ま、び、磐、城、阿、武、隈、小
 進、め、り、か、く、程、を、暮、小、及、び、例、の、銀、燭、と、點、り、列、ね、く、醉、飲、時、と、移、す
 ま、小、を、成、劑、と、も、覺、り、小、頃、傍、の、隔、紙、紙、と、開、き、蕭、然、と、あ、て、出、る、人、あ、り、
 這、い、誰、さ、ん、と、一、座、の、人、見、る、小、是、る、人、磐、城、の、愛、妾、髪、を、髪、と、あり、亂、
 紅、粉、と、小、粧、の、色、青、ざ、め、り、十、分、小、憂、と、含、み、景、勢、小、を、東、と、と、衝
 立、り、人、と、あ、り、怪、し、む、所、小、阿、武、隈、倍、と、復、て、声、と、勵、ま、り、汝、淫、婦、何

方へ往る。昨夕朝夷刀称と歓待て。その後小居らば館の隈と求め
 飽儀渠定く小密夫ありて。今宵賓客の紛まふ走りし人然いあれ。
 寝城の刀称い汝といひ吾も平生と鵠思と。うけたるとも願ふに
 不良の挙動ありて。その後何の顔ありて。人小面合せんと。う湯小長き秋の夜
 と。同睡ともなかりし。何方へ往て今まを居らる。ま其上不賓客と歓待席へ
 案内もるさだ枕小乱まう寐さすと髪と。把揚もせを臆もせだ。ゆら烏詩の
 挙動あり。頷く下を疾ゆらむやと。朝夷寝城と尻目小うけて。一髪高く四言
 まら。岩測芋瀬と始めと。興醒自小瞻望と。當下懸る徐と。寝
 城がるへ坐とありて。阿武隈大夫とんかへり。辨釈からしうらわ。然宣
 ふも無理ありあねど。こま小容子のるまとうい妾陋き賤女の節操後
 ぎいあもとも。かまを深き思とうけ。何と不足小異夫と。重ねて身とや

匿まき。とをわりのも猶疑ぐいまん。さうと昨夜うりの一始終明と地小いも
 らの席小面伏する人もあつて。いふとすれば巴が牙の証明とまふ小あり
 うけま。果衣まむまら侍るまん。その仔細他る。朝夷大人の鎌倉より。
 小使のこられ敬ひ冊き奉り。努味畧あると。主の刀称のれぐも。
 命畏し酒宴の席の果て卧房へ入らうと。侍女どもあうち任る。被るさ
 條小もあうんえと思ふありて子舎と出。彼処へ到り。日中の程召され衣の
 前後も心着んと。衆りる小。や侍女ども其処と退き。朝夷大人の卧房小
 あり。妾往して傍侍小。咄狂ゆる。頃の長途不足と太く病。嚔と捻
 まてさうせんやと宣ふく。小否む術。傍へ倚て脚とと。撫摩する。糸ら
 する。その折忽地起上り。腰捻して。當座の計畧。実い汝小国の御と。まこ
 せんとの為る。去来と。ととと横陳して。旅中の憂と暗させ。と心ひも



月夜七編卷四

十九

いそや

S. H.



草莽七編卷四

めいごま

計策を
 投る
 盤手
 再び
 朝夷と
 言ひ

鶴膝の文の透
 海陀の石の石

雨常の珠
 麟の頭首

物ひる

物ひる

うけぬ難題なんだ小嗟あなやと胸むねの噪なげども。十四十五の處女とらふの如ごとく。その低逃ひなんもうは
 る。然さらして深ふかく慙あはれあはるる。怒いらりたるんとも恐おそま。右左みぎひだり回まわり答こたへ口くち隱かり
 う。その意い小従おとげふべきさうわ。身みと遊あそんでその仰あやい。有あり難がたく侍さむらひども。
 妾めかけへ既すで小こ髻まげ城しろめ。小恩おんと稟らう者ものありて。その詞ことばあは順ゆひがう。奴おれ君きみを
 嫌きらふ小あねと。そののの許ゆるしと願ねがひまうつと。いとも許ゆるさん仁王にわうの如ごとく腕うで突つき
 出でして妾めかけと袂たもとと緊きと揪しぼへ。汝おれあやどや吾われいとも。此陸奥このむつでも鬼神おにと武勇ぶゆうを
 村むらへらまう。才さいあり。まこ。兼倉かねくら小誰これわらへ。和田わだ茂盛しげの三男さんなんあて推貴けんきも惶おそれぬ
 英雄えいゆうと人ひとも譽ほめ吾われも誇こほふ。されと思案しあんの地ちとりの。汝おれが色香いろかほを愛想めづひ既すふ
 泄ひせ。一言ひとことと仇あだするす。も為なせんや。蝦令えいりやう磐城いわじの側室そばめあは。実まことの渾家むんけふあり
 と。の想おもひ詰つめる一念ひとしんと翻ひらくまき吾われあや。と時ときの権威けんいと勇力ゆうりきと。鼻はなふ
 挂かる面憎つらさ。振あきさん。思おもへども。羅綾らりやうの袂たもとと切きり。七尺しちせきの屏風びやうぶ。權ごん

つふうう。猶なほ躑しむ躑しむである。不ふ慮りの備そなへ。平生つねより。収とむる所ところの懐なつ劍けんと。ま早くぬ抜ぬくと
 辞ことばする所ところあり。不ふ慮りの備そなへ。平生つねより。収とむる所ところの懐なつ劍けんと。ま早くぬ抜ぬくと
 あさり。と。是これを敢あて取とり。扱あげ。女をんなふ。似にげ。る。又また物もの三味さんまい。こま。あ。深かき。故こ縁えん
 あ。ん。疾はや言ことばう。責せられても。固かまり。巧たくまり。て。お。何なにと。い。べき。弱よわも。う。
 弱よわ果はる。網あみの魚いさなの。と。交野まじのの。斥はつ。夫おとこや。恋こひ。と思おもふ。の。朝あさ。大おほ人ひとを
 怒いらり。不ふ慮りの備そなへ。平生つねより。収とむる所ところの懐なつ劍けんと。ま早くぬ抜ぬくと
 閑あひて中なかつへ突つき。刺さす。様よう書がき。挂から。ま。て。物ものり。て。も。う。柴しばの。葉は末すえの。露つゆ
 と。命いのち。消きえ。入いる。思おもひ。ひ。あ。て。夜よ。明あり。れ。と。許ゆるされ。を。檢けん断だん。不ふと。出で。性しやう。う。ふ
 迹あと。あ。下した。僕おれ。西にし。三さん。個こ。夫おとこ。と。多おほ。小こ。未ま。査さ。と。入い。附つ。ら。ま。て。辛から。り。て。道みち。と。出で。せ。り。や。う
 も。う。半ま。死し。し。る。思おもひ。の。折をり。う。の。番ばん。人ひと。の。下した。僕おれ。多おほ。が。や。酒さけ。嚙か。と。權ごん。し。の。後のち。あ。い。各おの
 爛らん。醉すい。し。て。前まへ。後のち。も。あ。ず。伏ふ。さ。る。願ねが。ふ。て。も。う。き。僮たう。倅けい。と。足あし。の。先まへ。あ。て。伏ふ。さ。る。曳ひ

あけまづ其場とて遁とるがも。渾身痠痺て動くも故小哲く子舎
 小潜ひそ。稍人心地着あふり。いそよの終止るとあふ泰て侍るる貴
 るる人の善らぬうと。言さふいと鳥齋る所為也。後の崇たかもいろうを
 らんと心痛めて侍まども。さすの証とてさふ在の隨立意とて言する。
 其処不在とる朝夷大人も。悪くも把とひそと真偽うち交て。満
 坐の中あてはつ笑ひつ。言なりして朝夷持する匙しと投捨眼を
 睨にらみて。髪かみもの方とらち白眼て声と荒らげ。いふも仔細の不審一
 けまづ後小搦て袋戸へらち籠かごうの突つ然ぜんあり。その餘の汝りの小所
 會表裡あひらるる食言あて。言と巧たくまふ吾とて。猶不爰の徒たふまんとする。
 その謀畧の誰教しを。まづ時直り阿武隈大夫の別て逐一聴いそ。の
 餘の人もその事小。賦ふしるや否いないあねと。二座の不肖小猶聽べ。これ一

件ことのふとあり。昨夜人定の頃ころふ及び。媼婦おんぶ来つてりまこと。挑いち。その情頗おる
 虚言うそなれば。假かりふ惑へつ面持おもて。猶その容と窺うかがふ果たましと。匿ひそむるは首
 故ゆゑこそあまこと責問せめふ。いさるる條すぢ主人時直阿武隈多謀計と。吾われふ放
 へて刺客あせきとらぬ。と。緯いと明あく地小首伏くつせり。加之か支しるる媼婦おんぶ先まししびび鉄
 盾たて矢や藤ふじ五ご重じゆう連れんぐ妹いもうとあて。吾われと敵たてと窺うかがふ。具ものひひの偽いつはりるる。弁べんの
 公こうの道理とあふ。怨うらむままき者ものと恨うらむ。匹婦ひつぶの一念いっぺん許ゆるす。許ゆるがららく
 鮮あざししぐぐこれこれの。足下あしもとも何なにの趣意しゆいとあり。吾われと婦女子めづこのなと假かりて。害がいさんさんと
 做なししるるも。心こころははななれれ奉動ほうどうあり。斯かく詰じららいい然しかららいい決けつして非あやままと陳ちんすべ
 けまづ。媼婦おんぶの慥しんかの証人しやうにんと。縛くわめめああききと下僕げぼくをを懈あやまりりして逃にげげられれと
 猶懲なぐさむむまま小こ陷おちままんと。あふ未まままの夏虫なつむしの火影ひかげ小こ令しやう棄すままるる奉動ほうどう小
 髪かみ方かた髻むすりり。将まさ来きたその次身つぎみと美みりりんと。同詰どうじららままても時直ときちゆうのの向むかふ湯島とうじま

と密談して思ひ儲けしとるれば此も膝まで呵くと冷き笑ひて童然
 ぢぢぢ。喧嘩下れ言とりて詰るるを笑止る。吾このふ懦なりとも。
 足下ふ太き怨ありて。害さんとも欲まらる。争甲斐なき女お託さん。
 鬼神ふもあま梵天王の再来ありとも一個の人あり。吾とても壯たる。
 必死と究めば何と怖まん然あわまを朝夷大人漫ぶ此の言をふと
 設けて威して人口を閉ぐんと討らるる酒具の戯事。流してよと宜ふ
 こと。天晴直るる氣象いんえ。特母敷とていふこと。冷き笑ふ朝夷の
 聴ふは堪ぞ膝を垂し。断と做してを居たりける。



朝夷巡島記全傳第七編卷之四

吉田屋

吉田屋

